

★私の意見

# 「海の子の家」

によせて

丸川 栄子

〈児童文学作家〉



生れも育ちも神戸という純粹の神戸っ子である私は、かねがね神戸の作家でなければ書けない作品を、ぜひ書きたいと願っていました。そしてできたのが、最近出版した創作児童文学「海の子の家」(小峰書店)です。

「海の子の家」とは、神戸港で働くハシケ生活者の子供達を預って、集団生活をさせ、学校へ通わせている市の施設、神戸水上児童寮のことなのです。

神戸港へいくと、ハシケがタグボートに曳かれて往ったり来たりしているのや、ハシケだまりに並んでいるのを見かけます。ハシケは、神戸港の風物として欠かすことのできないものですし、神戸港の隆盛を支え続けてきた大切な担い手です。

でも、その小さな舟の中で、一つの生活がひっそりと営まれていることを知らない人が、多いのではないでしょうか。まして、ハシケの子供達が、どんなにして育っていくかということを知っている人は、きっと少ないと思います。私は、神戸に最も相応しい題材として、ハシケの子供を書こうと考え、取材のために水上児童寮をたずねました。そしていろいろお話を聞き、自分がハシケについて全く無知であったことを痛感させられました。いつもゆれ動いていて静止することない、海にとりかこまれた住居。その中にいる子供は、フラフラせずに真すぐ走ることが不思議なのです。洗面の水さえ不自由な生活です。便所も風呂もありません。世間から隔離された舟底の狭い部屋の中で、家族とだけくらす子供達は、ハシケの生活を知らない私達とは反対に、陸の上の生活を全く知らないのです。

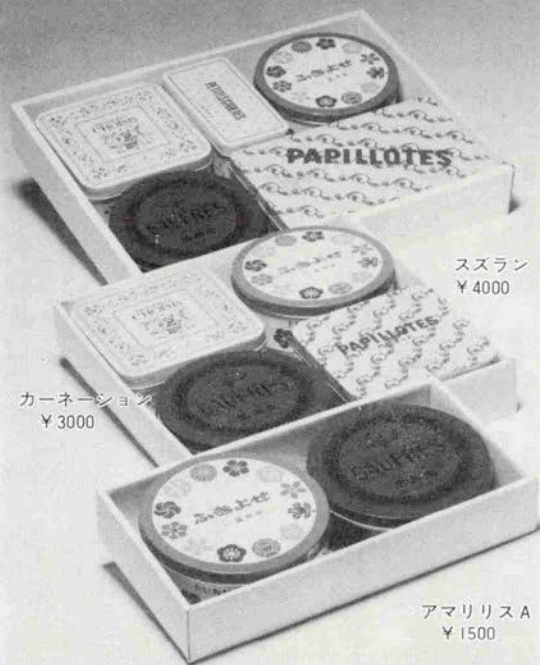
水上児童寮の職員の方がたは、こういう環境の中で育った子供達を預って、お世話なさっているのです。私は、その御苦労を、また幼くて親元を離れなければならない子供達の心を、案じながら手元から離さなければならない親達の心を思いました。

神戸港の繁栄の陰に、こうした世界、こうした人びとのあることを「海の子の家」は学ばせてくれたのでした。

# お中元は

お菓子でごあいさつ

味のバラエティをセットした風月堂オリジナル  
のご進物セット、数かず取りそろえました。



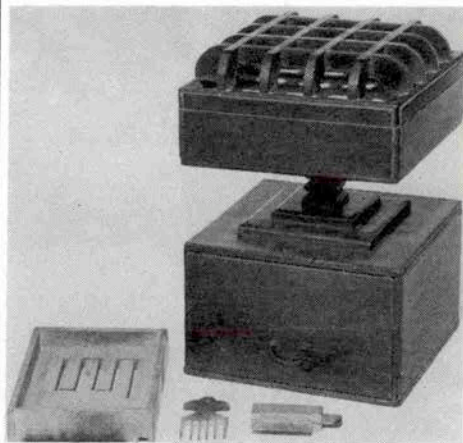
古い老舗に新しい味覚



神戸 風月堂

本店・神戸元町3 TEL (391) 2412  
全国有名百貨店・名菓街・のれん街

# 美術 古骨 刀剣 書画



香時計 (江戸期) ¥170,000

鑑定 買入

研 白鞘 拵 御承処

神戸市生田区元町通6丁目25番地

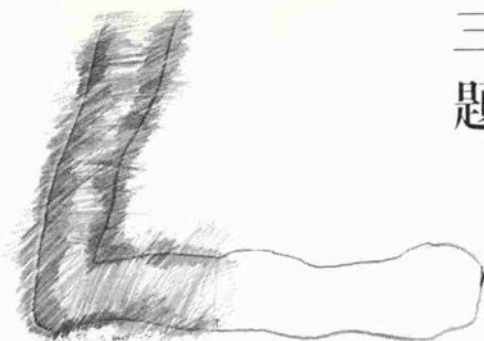
刀 古骨  
劍 美術  
董

元所美術

〒650

TEL078-351-0081

# 随想 三題



カット／堀尾貞治

## この頃思ふこと

堀尾 貞治

〈造型作家〉



最近一カ月間パリ、ドイツ、ベルギー等を美術館、画廊を中心にまわってきた印象と神戸とをあらわして書いてみようと思う。

パリへついてびっくりしたのは、その古さである。建物が石をベースを出来ているので今日まで

残ったのだと思う。行くまではノートルダム寺院、凱旋門、ルーブル美術館、サクレクール寺院等々が日本の観光地と同じようにそこだけ古くて、あとはびかびかの建物が並んでいるのだと思ひこんでいたが、そうでなく街全体がノートルダム寺院と同じように古いのにびっくりするしうれしくなるしで、最初の頃はどこを写真にとっても絵になる感じでパチパチと恥かしいくらいうつした。パリ市内を歩いていると歴史や文学に出てくる所ばかりで伝統的な行事や生活を大切にしていて側面からみていて好感がもてた。衣食住の日常茶飯に使用しているものが確かな造りで生活のやり方が堂に入っている。僕のいたホテルの近くには沢山の家具職人がいて、昔ながらのやり方（手造り）で仕事している。誇らしげであった。神戸の街でも子供の頃、露路で大工さん、いかけや、竹細工、馬具職人と沢山やっていたのを想い出した。

サンジェルマンはパリでも新しい作品をとりあげている画廊が集まっているところで、よくここをぶらぶらして、いきつけのカフェで昼食をしていると、そこへイギリス、イタリア、スイス、ベルギー、ドイツ、アメリカ等の画学生が来てさすが芸術の街という感じである。或日、画学生と金管楽器

を持った一団とがやってきて、何やら大声でまくしたて、一同カフェの前に一列横隊になり、いきなり演奏し始めたので僕はびっくり、七十才ぐらいのよっぱらいのオッサンが指揮をし、通りがかりの太ちよのオッサンとおばはんが、がっしりと組んで踊りだす、そこへ若いのが加わりポリさんが来てヤジ馬になり、カフェのマダムは商売を忘れてみとれるといったハブニングがあつという間におこる。一カ月の間に五、六回みたが何度みても自然でうれしくなる光景であつた。「神戸カーニバル」がみてしんどい感じがするのはどうしてだろうか……。

パリでは貸画廊がなく、画廊の主人が作家をえらび作家を資本にして金もうけをしているので作家を大切に作る案内状、カタログ、ばかでないポスター等画廊がすべて金を出す、これはあたりまえのことであるが日本の場合この反対で作家が売れるまですべてに金を出し画廊の主人がそれで経営するというおかしいことを平気でしている。県立近代美術館の企画でも案内状づくり発送等作家負担にして、展覧会をしているなどまったくおかしい状態で作家もそれを拒絶出来ないことがおかしい。いくら美術館をつくっても作家がいなかったら美術館はないのであつて

こんな馬鹿げたことをしている限り日本からは作家は生まれてこないのではないかと。

パリの一等場所にはアメリカ、イタリア、その他の国々が画廊を持ち、その国の新鋭作家をとりあげている。日本は何もなく淋しい思いをした。画廊の主人は自分の考えを持ち、それ以外はみないという徹底した姿勢を持っていた気がいい。日本のようになんでも売ればいいというのではなく画廊が個性を持ち、日本の作家のように美術雑誌で流行におどらされることがない。ヨーロッパではオリジナリティのある作家がじわじわと育っているように思う。日本の場合オリジナリティのあるよい作品を買う人が少ないのと、画廊が自分の考えを持って、経営をやる資本のないことを考えると、現状も理解出来るので画廊をせめるわけにはゆかないが、神戸に一つでも主体性のある画廊が出来、世界的な視野にたつてくれるよう願望する。

## 思いつくまま

訪欧の旅より

松本 尚女

《画廊舞松本流家元》

旅にでるまでは、いろいろな夢と期待に胸をふくらませ、ヨーロッパは、さぞ美しい所であり、ごみ一つないのかと思っていました。ローマもパリもスペインもきいたのにびっくりしましたが、夜中には水できれいに町を洗っているのは良い事だと思いました。

ロンドンでは桜が咲き、スペインでは桐や藤が、花ざかりで、ローマではつつじに似たお花が満開、スイスではチューリップを初め、三色スミレ、可愛い草花で公園は一ぱい、リスが自由に遊び廻って、自然の中の美しさに一ときのやすらぎをおぼえ楽しい思い出の町でした。

スペインの有名な闘牛、セリビヤの花祭と一緒にしたのでたいへんな人で見物もむづかしいようでしたが、とにかく見ることができましたが、私達にはあまりにも、



左より二人目松本尚女さん

可哀想で、最後まで見ることは出来ませんでした。神様に牛をささげる行事だそうです。今でもそれがつづけられていると言うことに感覚的な違いを見た思いでした。今はショーとしてのあつかいの方が多いようです。

牛がなぶり殺しにされるのはたえられませんでしたが、闘牛士の美しいスタイルと美男子揃いには、あつと思います。

でもやっぱりその人々によって牛を殺すのかと考えた時は、美しさが半減いたします。

次に使節として訪欧の旅をしたのですけど、有形の文化保護委員の方々とのお話会で、私達の様に無形の芸術に対してのお話はあまりできませんでしたが、英国でもやはり芸術に関しては中央政権のよう申されておられました。オペラを見たり、歌を聞いたりという機会がなく大へん残念な事でしたが、茶道も舞もよく分って頂けた様で、いろいろと何年位すれば、どの様になるかと、感心して見て下さった様で、品が良いとか、一つ一つのポーズに意味のあることが良く分る。中にくわしい批評をして下さって嬉しく、やれやれという思いでした。スペインでは音のあるものが良いのではないかと考え、尚巳さんに、千鳥を足拍子を入れてやらせたところ日本の

よくわかって頂き、とても受けた  
ようです。とにかく、日本のもの  
は外国におとっているように思う  
のは広い土地、巨大な建物の中に  
ある芸術作品、立派なものではあ  
りますが、渋味とか、奥深さ、壮  
重さにはかけている様です。私達  
日本人は、外国にカブレすぎてい  
る様です。もっと自分達の物を大  
切にし、自分の国の芸術に誇りを  
持たねばならないと存じます。

日本の国は、すばらしい国です、  
世界中で一ばんぜいたくなのでは  
ないでしょうか。

もう一度、見直して下さい。

自分の国、日本を。

古典芸能をやっている私達、今  
日あるこの喜びを訪欧の旅でより  
一層深め、その任の重さも又、格  
別でありますが、より良い物を作  
品を作り日本の為に役立たせたいと  
考えております。

## 昨日の敵は 今日の友

中川 宗和

〈デキシーランドオーナー・ピアニスト〉



エリザベス女王が来日されてか  
らクイーンズイングリッシュが話  
題になりましたが、私の周囲にい  
る神戸在住の英国(UK)の友人  
達ときたら、イングランド、スコ  
ットランド、アイルランド、ウェ  
ールズ、その上、ヨークシャーあ  
り、ランカシャーありで、出身地  
の訛りで喋るものですから、あ  
れを英語といってもいいのかどう  
か……。

彼等が、お国言葉で出身地の民  
謡を大声で歌う時の誇らしげな  
顔、そして陽気な一面もあれば、  
子守歌を歌って遠く離れた母親に  
想いを寄すのか、ビールに酔った  
顔をクシャクシャにして落涙して  
は、ブーンという大きな音をさせ  
て、ハンカチで鼻をかむのです。

テレビでサッカーのワールドカ  
ップを見てご存知のように、サッ  
カーの試合や、ラグビーの試合と  
なれば、その熱狂的な応援には出  
身地の誇りと、数世紀にわたるそ  
の歴史的背景を無視することが出  
来ません。

さて、この人達が集まって、ビ  
ールを飲みながらスポーツの話題  
や、音楽、芝居?の話が酒のサカナ  
になっていますが、彼等が一番好  
んで喜々として熱中するのが戦争  
の話題です。

戦争といっても近代の血なまぐ  
さい我々の記憶に残っているもの

でなく、学校で教わったような歴  
史的なものなのです。

もちろん、我々日本人が学校で  
教わった以上に彼等にとって地元  
のことですから、その話の中に、  
気候やら、地型、その日のお天気  
迄、「講師師見てきたような嘘を  
言い」的な「血わき肉おどる」自  
分達の祖先の手柄話が代々、続い  
てきたものでしょう。

その頃の敵と味方が、ビールを  
飲みながらクイーンメリーの事件  
や、バラ戦争のこと、その他領地  
の取り合いや小さなことまで、ま  
るで昨日のこのようにケンケン  
ゴウゴウとやっているのを見てい  
ますと、太平洋戦争が、一時間前  
にあったように感じてきます。

国民性の違いと言えば、それま  
ででしょうが、ま、英国と一口に  
言っても、人種的や言語学的に詳  
しくなると同じ島国でも、我々と  
大きな違いはありますが、一度、  
我々日本人も源氏、平家、豊臣、  
徳川等過去帳をひもといて、敵味  
方に別れて、ビールでも飲みなが  
ら議論してみたらと考えてみたの  
ですが、一寸シンドイ気もします  
し、我々の国民性から考えて、本  
格的になったら、ツカミあい、ド  
ツキあい、血をみることになっ  
て、あの世の祖先を苦笑させるこ  
とと思います。

## □ある集いその足あと

### 神戸空襲を記録する会

君本昌久

〈神戸空襲を記録する会事務局長〉

人間の記憶はどれだけの時間で風化するものか。いくら記憶に強いといっても三十年の歳月にはかなわないだろう。ところが、あの三十年前の空襲から奇偶にも生き残った人びとの炎の記憶は、まるで昨日の体験のように鮮烈である。それも生き地獄ながら生死の境を潜り抜けた人びとであれば、恐らく、忘れ去るわけにはいかないだろう。むしろ、恐怖の記憶を持ちつづけて生きることは耐えがたい。天災として忘れてしまいたい。とはいえ、どうしても思い出してしまおうのがあの炎の記憶である。

その三十年前、神戸は二月四日から八月十五日までの相次ぐ空襲



西半分が灰じんと化した元町通り左は風月堂

で、市街は殆ど焼け野原となり、八千四百四十八人の死者を数えた。といっても、この死者の数とて安心できない。証言者の報告から割り出していけばずいぶん計りしれない死者が出ていたことは推測できる。それに、当時をふりかえってみれば、十代の娘から三十歳前後の若い主婦たちの多くが、あの空襲の炎の海を逃げまどい、幼いわが子とともに焼死体となつて、るいるいと折り重なつたのである。さらに、犠牲者はその家族、といつても、老人や病人など弱い人びとであつた。そして勇ましい人は、その時間家にはおらず、また、少しでも戦力とみなされる人間はすべて一網打尽に戦争へまき込まれることを余儀なくしていた。したがって、勇ましい人間はともかく、弱い人びとがあの戦争を逃げきることがとうていできずがなかつた。そのことは現在の公害を招き寄せた繁栄の世の中といえども、五十歩百歩、さしてちがつているとは思えない。

神戸空襲を記録する会は、記憶が風化する危惧と、証言者がいなくなるということ。それに空襲下の弱い人びとの暮らしにとつては断じて戦争はカッコいいものではなかつた。だから一日も早くその体験を記録しておかねばならない。そして作業にかかったわけ

あるが、あれから三十年の歳月は身も心もしばつた。体験者の多くは高齢化し、中には一人、二人と亡くなつていく。それに、初めて筆を持ち、いまわしい記憶をゆさぶつて記録を書くのは耐えがたくさらには、言葉ではいい尽せない思いがあつて、堅く口を封じて語ろうとしない人びともいる。また空襲を招き寄せた責任と負い目もあるだろう。したがって、体験者も十人十色で、空襲を記録する作業にはかなりの根気がいった。

周知のように、空襲を記録する運動は全国四十二都市で野火のように広がっているが、神戸の場合は有志の人たちが身銭を切り、手弁当でやっているのです、どのようにして、どこまでやれるか、という見通しさえつかない有様である。でも、四十六年九月、四十人ほどの会員から発足して五年、ともかくやつとの思いで、「神戸空襲戦没者慰霊碑」の建立につづいて、「神戸空襲体験記・総集編」(七十編の体験手記と日記・写真および資料)五百二十頁を自前で出版することができた。さて、このやつとの思いがどのようにに継承され、発芽するのかしないのか。ただ今は、六月四日の「野坂昭如独演会」を終えて、八月に迎える神戸での全国連絡会議の準備をすすめているところである。



新しいと  
ゆうことは  
いつまでも  
古くならない  
ことです。



店舗づくりのプロフェッショナル

信頼される



(株)神戸日建

神戸市葺合区御幸通3丁目1

PHONE 078(251)3525(代)

NIKKEN MEMORY SERIES<6>

喫茶 8 番

建築した当初はたいへんモダンだということで評判になりました。新聞や雑誌の方も撮影に來られ、お店の商業にもなり、良かったと思っています。

神戸日建さんの建築は、時代の先どりだけでなく、お店で働く者とお客様の両方の立場の快さを考えてくれています。今度改装の時も神戸日建にお願いします。

□神戸っ子談話室／ニューヨークの印象などを語る鴨居玲

アメリカ経由で帰ってきた

# ラ・マンチャの男



Rey Kamoi

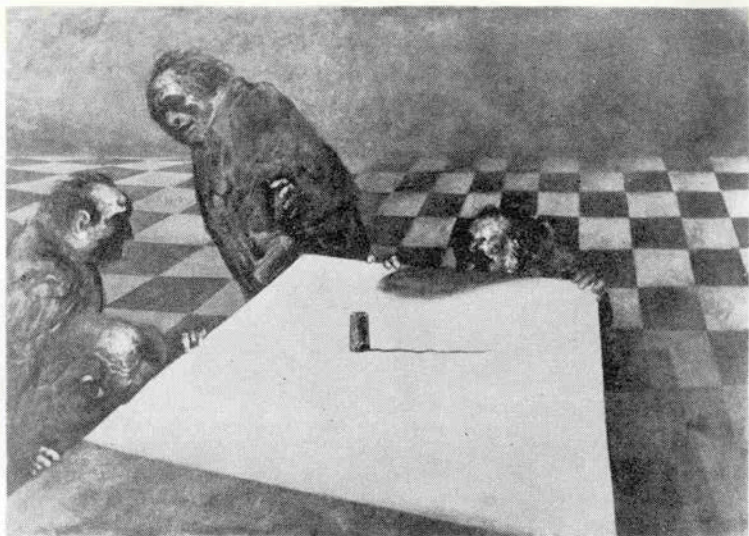
行きたいと言うのよ。私は人間の心理内部をあつかう人間だから、これらの絵は全部欲しいくらいだ。この絵をアメリカ人に見せてやりたいとね。何かあるのかって？私の絵に。それは私が聞きたいよ。私は今、描きたいものを描いとかなきゃいかんという心境になっているの。どこでやっても同じだからね。

(ちなみにニューヨークの東57丁目とマジソン街が交わる一帯は、東京でいえば銀座五、六丁目の画廊街にあたる。ハマーギャラリーはその中で百年の歴史をもつ老舗画廊。日本人の具象画家の個展は初めてという)

ニューヨークの二日酔いを羽田まで持つて帰り、この一週間ばかりの短いお里帰り中も、東京、名古屋とひよいひよいと大まかに飛びまわる。昨春のバリでの個展、そして今回のニューヨークでの個展（ハマーギャラリー、五日二十八日～六月十四日）とスケールの大きい活躍ぶり。「ふるさとをまたない男」だからという鴨居さんがこよなく愛す神戸の街で語る近況は――。

昨春バリ日動画廊で開いた個展でのできごと。あの個展は好評でね、私もTVに出たりしてたのを、たまたま見ていたおもしろい男、それがハマーギャラリーのプロデュサー、リボビッツ氏だった。この男がすこぶるおもしろい男で、ソ連にコカコーラを売り込んだ人なんだけど本職は大学の心理学の教授。しゃべっていてぜひニューヨークでやりたい、アメリカにおまえの絵を持って

アメリカの印象といっても、たった一週間、しかもニューヨークだけだから。まとまらないねえ。東京よりまきたないよ。神戸は帰ってくるたびにきれいになってるからうれしい。空港に降りたってそれからホテルに行くのにタクシーに乗るわね。その国の印象はタクシーの運ちゃんに大部影響される、僕の場合は。たまたま乗り合わせたのはまだ運ちゃんになって二日目という奴。ご存知のとおり不景気で電子工学やってた人が運ちゃんになったり、絵描きが運ちゃんやったり、食えないからね。「エンバイヤステイトビルはどこや？」こっちに聞くぐらいの奴なんだけど一生懸命案内してくれるの。僕は疲れてるからホテルで寝ると言うとしんそうな顔をしてね。まとまらない妙な国だねアメリカは。色んな情報で



最新作「チェスをする男」

スペイン生活は満四年。ヨーロッパでも別の世界ですよ、あそこは。スペイン人はフランス人のように近代化されていないね。フランスの遊びの精神、あそこは大人の国だね。「エマニエル夫人」日本でもカットされたとは思いますがスペインでは何と上映時間三〇分。そんな国ですよ。私の村はスペインの田舎だけど、オッチョコチョイで世話好きでお人好しで……私、好きです。このあいだ電話したら、あらかじめ知らせておいたんだけど村中の人が集まって来て、「カモイ、カモイ、カモイ」の連続よ。国際電話は高くつくし、私が言葉がうまくないこと知ってるから「カモイ、カモイ、……ガチャン」私の村の住人は「私たちの血はガソリンだ」といつてますよ。ラテン系の人はオッチョコチョイ、だから私は好きなんですけど。羽田に着いて物足りないのは、「いま帰ったよ、オッカサン」というのがないからだろうね。寝たきりでもいいから生きてほしいもんだよ、お袋さんは。

つくりあげたイメージと実際はちがう。パリーニューヨーク間が5時間、ニューヨークからロスアンジェルズまでも5時間。とても大きい国だね、でも私は好きよ。今まで行ったことがなかったのは戦争で負けたから。例の運ちゃんていい印象をもちましたね。妙な国、妙な人たちといえは一番妙なのは日本人だと思うよ。

(ブラッディ・マリーを飲みながら、仕事に忙しかつたので今は大変疲れているという。男の伊達を感じさせてくれる鴨居さんの今日のいでたちはジーンズの上下、アメリカ製の硬いジーンズではなくパリの例の柔かいスマートなジーンズ。)

この人が、タバスコが眼に入って飛び上りたくなつたのをじっと我慢してる光景なんて……笑ってしまうけど本当にあった話だそうです)

これから私は裸婦を描きたいと思っていますよ。人間を描く場合に欠かせない性の問題なんかをね。今まで「なんか恥ずかしい」という気がして、そんな教育を受けてきたんでしょうね。元来、僕は恥ずかしがりやですけど。外国をウロウロしてやっぱり私は日本人であると感じますね。どうしても越えられないもので、それを越える人間なんてありえないと思いますよ。そして西洋はすべてすぐれているということはないとも思いますね。

(赤尾兜子さんの「ささくれ立つ消しゴムの夜で死にゆく鳥」の句を見ると鳥肌がたつくくらい共鳴するという。デッサンと色紙を交換するという約束、覚えててくれるかな?)と。ニューヨークで竹田の洋ちゃんと再会したけど、そのうち神戸っ子の洋ちゃんのページに出てくるでしょうね、と。神戸、いい友、いい酒は鴨居さんにとっては、やはり疲れをいやしてくれるのでしょう。現代のラ・マンチャの男はこうしてロバならぬ飛行機で私の村へ帰って行きました。)

□ある現代美術家の非芸術的なレポート〈8〉

# デュッセルドルフにて

河口 龍夫  
〈造形 作家〉

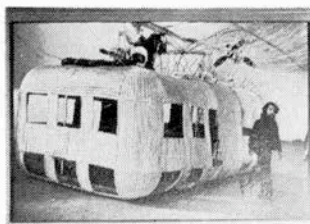


西ドイツのデュッセルドルフに出かけた。ホテルの予約なしで出発したので、デュッセルドルフ駅の案内所でホテルを捜した。少々高価ではあったがシャワー付きの清潔な

ホテルがあいていた。

ドイツへ向った目的は、現代美術にすぐれた作家を多く輩出し、市場的にも活況を呈していることを日本の美術評論家が盛んに美術雑誌に書いているので、どの程度のものか自分の眼で確かめたいと思いたったからであった。

もちろん、短期間の滞在で多くを見ることは望めないとしても、ドイツ現代美術の一端にでも触れればと思ったからであった。ところが、画廊や美術館では、ドイツの作家の作品にはあまり出会うわないで、アメリカの現代絵画の良いコレクションに出会った。アメリカのアクションペインティングやポップ・アートの大量の進出であった。ポ



ロックや、ローシエンバード、リキテンシュタインやステラの代表的な作品があった。

「絵画の力強さ」をすごく感じさせられた。それはそれとして見た意味があったがドイツの若い作家の作品にあまり出会えなかったのは残念であった。デュッセルドルフ市立近代美術館では、これまたアメリカの作家、ブルース・ノーマンの回顧展が開催されていた。美術館の入口前でドイツの若い作家数名が大きな木で美術館をあたかも抗議するかのごとく制作をしていたのが印象的であった。すぐその近くにコンラッド・フィッシャー画廊と言う、比較的新しい美術、コンセプチュアルアート（概念芸術）を一貫してあつちっている画廊で、パリエンナールにも参加している若いドイツの作家と話すチャンスがあった



が、外国の作家の作品ばかり  
買い、展覧会をするわりに積  
極的に我々の展覧会をやらな  
いとないていた。日本では  
どうかと聞くので、日本でも  
同じような事情で、例えば国  
立の美術館では日本の作家は  
物故作家でないと展覧会がで  
きないひどさだとなくさめあ  
ったものだ。それでも、デュ  
ッセルドルフ市立近代美術館

のカタログを見る限り、アクチュアルな問題をも  
ったユニークな現代作家の企画展が多く開催され  
ているのは興味ぶかった。その若者は、ビエン  
ナーレにデュッセルドルフシーンというタイトルの  
グループとして参加していた。その作品がきわ  
めて厭世的であったことを思い出す。コンラッド  
・フィッシャー画廊では名前はわすれたが、ドイ  
ツの作家で写真を使用した概念的な作品を展示し  
ていた。画廊のとなりはあの有名な、ヨゼフ・ボ  
イスの事務所であったが、何故か旅行中とかで閉  
っていた。思い出し出たが、デュッセルドルフ市立  
近代美術館で昨年、日本―伝統と現代―絵画、グ  
ラフィック、彫刻、オブジェと題した展覧会が開  
催された。私も参加メンバーの一人に選ばれた  
が、くだんの若者はどんな眼でこの展覧会を見た  
だろうか。

その美術館のすぐそばの道路で、マンホールの  
フタをあけて地下の配電工事をしていたのを見か  
けた。ところがよく見ると、どうも配線が美しう  
さがるぐらい色彩豊かに色どられていて、当の電気  
技師もアーティスト風で、どうやら一種の芸術上



のイヴェントではないかと  
思えた。

ドイツでのもう一つ別の  
興味は、セックス・ショッ  
プに立寄ることであった。  
そのような店に立寄るには  
やはり夜がふさわしいので  
はないかと思ったのがあや  
まりで七時半頃、眼をつけ  
ていた店に行くと、もうし  
まっていた。店頭には、た

しか午前十時から午後六時迄開店と書きしるして  
あった。普通の商店と同じように営業しているの  
であった。そこで次の日、昼すぎに行ってみた。  
非常に清潔な感じの店内ではやる心をおさえなが  
ら、ゆっくりと見てまわった。作品を見るのとは  
また別の気持だ。老夫婦らしきカップルが本を見  
ていたが、きちんとした身なりで話し合っていた  
が、まるで娘か息子にでもプレゼントするのを選  
んでいるのか、それとも当人達の楽しみのためなの  
だろうか。本棚はきちんと整理されていて、男  
女のコーナー、レズのコーナー、ホモのコーナ  
ーとわかれていた。店主は日本人に大変親切で、あ  
いそよく色々と見せてくれた。

デュッセルドルフの公園はどこも大変美しく、  
のんびりした気分ひたらせてくれた。

ビヤホールに出かけたが、ポルノ雑誌でかわい  
たのどには、とりわけドイツビールがうまかつ

体験者から、30年後に神戸で

# 繁栄犯罪人に加担できない

野坂 昭如〈作家〉

開演が近づくと、文化ホールの入口付近にぞくぞく人が群がり出した。さすがにみんな若い、十代から二十代初めの男女。日が長くなってまだ明るみの残る午後六時。手持ち無沙汰なふうの、一人の男性をつかまえる。18才だという高校生。

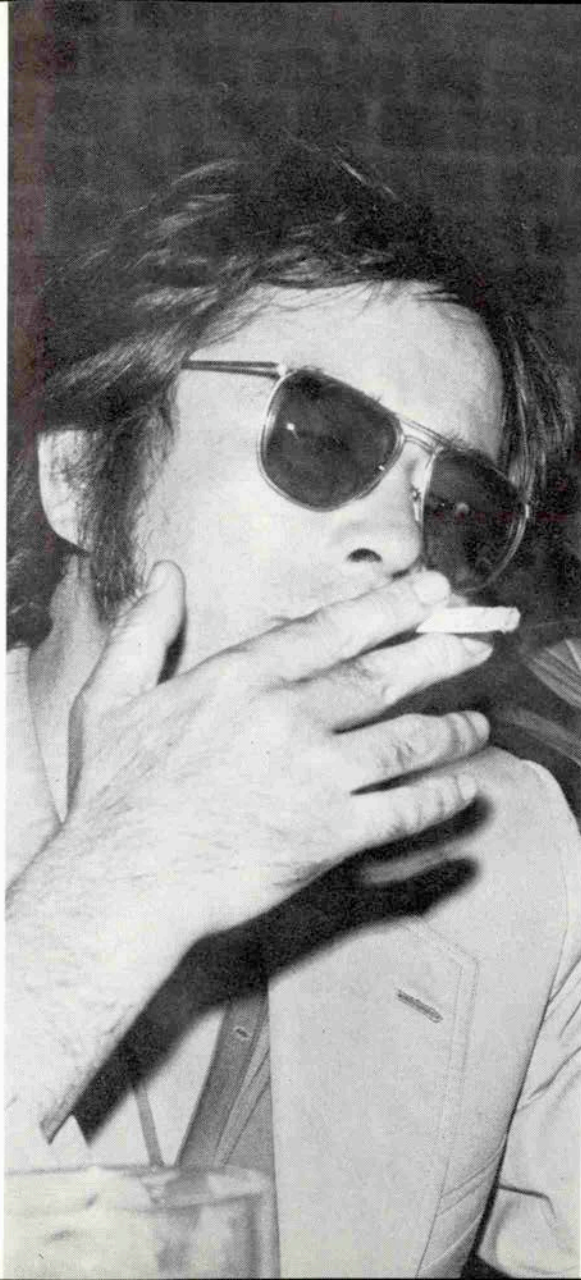
「今日はどうしてきたの？」

「あの人は僕の小学校の先輩ですからね。小説はわりと読んで。いろいろやっていることも、あの人はあの人なりの考えがあってそうしているんだし、わりと理解できますね。好きだな」

だいたいそんなことをしゃべってくれた。

野坂昭如 1945・夏・神戸。30年前、14才の時に神戸で大空襲に遭った。家を町を焼け出され、両親と妹を失った。その決定的な重みをひきずって生きている彼が「神戸の町を吊う」意味で30年後の6月4日、この独演会をもった。

翌朝、サンテレビの放送を終えた野坂氏に、お時間をいただきましたのですが、と申し入れる。昼すぎには東京へ帰るという、過密スケジュールの間をぬってのインタビュー。



——自分たちの子供の頃と、今の子供たちとあまりにも違うので、ふっと可哀そうって気持ちになるのね。だって僕が住んでいた頃というのは石屋川にカニやヘビや小さな生物がたくさん住んでいて、夏には毎日海で泳いで、子供どうしじゃ泳ぎに行っちゃいけないっていわれていてもこっそり行ってしまう。ところがゲタの緒が濡れて、それが乾いて塩がふいてくるので、海へ行ったことがバレてしまう。次からはバレないように海から帰ってくると井戸でゲタを洗ったりするんです。

神戸ってのはとてもいい町で、山がすぐ近くにあって海では泳げるんですよ。カニが川にいてね。それにちょっと行けばハイカラな町があった。新しく開けただけに大変おしゃれな町だった。阪急電車は当時犬を乗せてよかったので、御影なんかでたいい犬を連れておばさんが乗ってきたりね。ツイードのスカートはいてブラウスにカーディガンをはおり重たげな靴を持つってのが神戸女学院の生徒で、彼女たちは戦時中も家へ帰るとモンペをはかかったですよ。

僕は小説に書くと思うんだけど、「最後のケーキ」っていう、フランスに「最後の授業」という小説があるけれど……もうドイツがダメになろうという頃、三宮のユーハイムが店を閉まうので最後のケーキを、普段よく買ってた人たちに売ってくれた。ドイツ人のおばさんが「またおいしいバームクウヘン作るから買いに来てくださいね」って、もう、えもいわれぬ顔していったのを覚えてる。似たようなことはずいぶんあったね。トアロードの中華料理屋で、もうこれが最後だったというのですごいごちそうしてくれたり。土橋から出ていたケープルを降りて左側にお汁粉やがあって、それが昭和19年の夏までお汁粉を売っていた。西宮のパボニーって喫茶店は昭和20年の7月いっぱいまで開店していた。昔の記憶は、まだ子供だったからあくまで子供の目で見えたものだし、誰でも減びてしまったものを感じだして感傷的になるのも当然だけど、具体的に思いだしてもあの頃ユーハイムの

おばさんがいたり、パボニーのおばさんがいたりして。今住んでらっしゃる方にそんなこといっても感傷でバカバカしいって思われるかもしれないけど……。御影公会堂の下の食堂の支配人というのは、やっぱり最後に「これがおしまいだ」とヘンな魚のフライなんか食べさせてくれたんだけど、その支配人が今もその食堂にいらっしゃる。ユーハイムからは毎年僕の誕生日には「いつまでもバームクウヘンを作ることができますように」と従業員一同としてバームクウヘンが送られてくるんです。

——坂があって、坂を上ると住んでる町を俯瞰できる、坂を上ってふと振りかえると、昔は「弱の都」といわれていたように海の防波堤が扇のように伸びていた。外国船が五色のテープを飾って出港していく風景やら、聚楽館の上のスケートリンクに行ったり、六甲山のゴルフ場に父親に連れられて行くとか、六甲山ホテルに行くとか、ドライブウエイを車で下りてくるとか、須磨のほうに行けば魚がいくらでも釣れる……自然とあんなふうに調和した町はそうない、非常にいい町だった。昔の神戸は段ちがいにすてきだった。神戸って町が僕自身の存在とめきがたくある、僕がベストドレッサーといわれるとしたらまた僕が歌うのも小説書くのも、これは僕が神戸にいたからだと思いますね。

リサイタルで——。

早口の、もつれるような語り口（実際、アルコールがかなり入っているようだ）。を交えながら、ヒット曲を歌いまくる。客席は大人しい。舞台の前まで駆けて出て、花束を捧げる女性が何人か。

舞台の脇に控えまするバックコーラス総勢18名は、神戸女学院大学コーラス部のおとめたち。歌う野坂氏に「いつコーラスすればいいの？ととがめだてするようには、あるいはもの問いたげな面持ちで、全面的なほほえみをかすかに浮かべながら、顔を向けている。

パーズンブルース、トルコの心は母ごころ……、ねむれねむれ少女……。

「大型歌手として、さらにイメージチェンジをはかっております」と、イラストレーター黒田征太郎氏の紹介で、二度目に舞台に現れた彼、こんどは衣裳屋から借りたという、三波春夫もかくや、と派手な着物の着流しスタイル。

客席は相かわらず大人しい。

主催の「神戸空襲を記録する会」から君本昌久さんが登壇、「神戸大空襲」の記録フィルムが回り、空襲を語る。

「今は、特別な時代であるとは見えにくいけれどやっぱり平常じゃない時代ですよ。異常も感じなくなつて特別な時代を生きている。全てを知らされなくて不安だったあの空襲の時代をいましめにしないと……。少なくとも今は何んでも言える時代なんだから」



——6月5日にはよく神戸に来ていますが、5時30頃分にいつも空を見上げるんです。あの時、東の方から爆音が響いてきて空を見上げると、少し曇っていて、それが覚えている最後の印象で、そのあと気がついた時には家がほんぽん燃えていた。

妹は一年四カ月で空襲に会って、一年六カ月でなくなつただけで、今バンガラデッシュとか一時のベトナムで死んでいった子供たちを報道写真で見るとちよーうと同じように栄養失調から脱水症状をおこして死んでいった。医者に僕が連れていったら「こんなふうに腸炎で死ぬ子供が多いんですよ」といわれたけど。妹を葬るのが可哀そうではなかった。着物を着せると燃えにくいからダメだといわれて、燃えいように大豆のカラを下にしてその上に寝かせるんだけど、可哀そうで身体の下におしめをしてやりました。これなら僕が土に埋めてやればよかったと思つて。

僕たちは空襲にあうまでは、ケーキを食べたり肉を食べたり、ふつうの人に比べればよほど恵まれて暮らしていたんだけど、それだけに空襲の後のひどい生活との落差がすごくあったわけですよ。昭和18年の暮にまだクリスマスツリーを飾つたりしていた。ツリーの雪に綿をちぎって使っていたら、近所の娘さんがそれを欲しいというんだ。その時は何にそれを使うかわからなかったものの、そういう娘さんの顔の表情が当時の僕にもなにかひつかかるものがあつて、だから今も覚えているんだけれど、そりゃあ綿なんて貴重品だったんでしょね。

僕は今、朝から晩まで酒を飲んでいて、いざれアル中で死ぬだろうけど、もう今の時代こうなつたら飲むしかないって暗うつな気持ちなんですね。

——（戦争を）あれは特別なものだと考えてしまうのは大きな間違いで、今の現在の状態も同じようなことがあると思うんです。僕はいつもスモッグ情報を聞くと空襲警報を思い出す、現に今も空襲を受けているわけ。

あの時ひたすら逃げた。振りかえつて燃える町をきれいと思ったことを覚えてる。大本営発表の情報だけで全てを知らされていなかったことが不安を大きくもしたし、世間の方で拒否しておれば空襲も回避できたはずだ。その意味で僕は空襲というものを考えていきたいし、今とどう関わりをもたせていくかということだし、空襲体験の記憶は残っていないかと思う。僕たちにあの時大人たちがしたような同じことを、今僕たちが若い人たちにやっているんじゃないかと恐れるわけで、今はともかくも何でもいいいいことはいえる。本当に苦しい目に会った人は発言しないかもしれないし、死者もしゃべることはいけないけれど、僕はしゃべり続ける方がいいと思つて、いつももとに戻つてしゃべっている。苦労話がまた始まったと若い人は思うかもしれないけれど、あれは戦災は、天変地異じゃなかったという恨みを持ち続けていかないと……。 (オリエンタルホテルで)

美容室井上の

# ORIGINAL LIFE

あなたのヘアーライフに新しいモードをノ



7月のお客様／渡辺博子（神戸大丸）

この夏にふさわしく、個性的で  
シャープなボブのカットを試みました。

美容室

## 井上

井上繁和・カネ子  
生田区多聞通り4ノ9ノ1  
TEL 341-1110  
毎週月・第3火曜日休



おんがら屋



きものと細貨

## おんがら屋

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836 (代)

東店/三宮センター街・電話 331-0629

三宮店/さんちかタウン・電話 391-4303

東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298 (代)

渋谷東急店/5階和装名家街・電話477-3409 (直)

日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511 (代)

(内線294)

池袋バルコ店/4階着物小路・電話987-0561 (直)